東京大学宗教学年報 XL（2023 年）1–22 頁

論　文

宗教「学」をめぐる論争の変遷と現在
―国際学会のアイデンティティ・ポリティックス―

藤原　聖子 *

はじめに

2 年に及ぶパンデミックの収束が期待され，対面での国際学会の再開も進み始めた 2022 年早春，ロシアのウクライナ侵攻が始まった。それは国際社会のみならず国際学会にも波紋を投げかけた。筆者が事務局長を務める国際宗教学宗教史学会（International Association for the History of Religions，以下 IAHR）や，その親学会にあたる国際哲学・人文学会議（International Council for Philosophy and Human Sciences, CIPSH）では，この問題に対する声明の発出をめぐって以下に述べるような禍根を残すほどの対立が起きた。議論は，学とは何であり，それは何のためにあるのか，特に人文社会諸科学の存在意義は何かという問題に直結していた。この問題は日本国内でもこの数十年間われ続けているが，国際学会という場にはそれ固有の困難も存在する。それを認識し，日本というポジションの特性を踏まえながら国際的論争に加わることは，どの研究分野においても重要であり，宗教学も例外ではない――いや，むしろその歴史をふり返るならば，宗教学には現在の論争を先取りしている面もあるかもしれない。本稿は，このような論争の歴史的背景を順を追って説明し，現在の課題を抽出することを目的とする。

1．20 世紀の論争――宗教学のアイデンティティ・クライシス

田丸徳善は，国際的・学際的論争を踏まえて宗教学の歴史と課題を論じた 1977 年の論文において，その時点での宗教学の課題を「アイデンティティ・クライシス」と表現した。

> 宗教学がいま直面している課題とはそもそも何であろうか。それには多くのものが考えられるが，最も根本的かつ重要なのは，おそらくその同一性あるいは独自性に関するものであろう。われわれは，すでに本稿の最初で，この学問が依然として十分な基礎をもたず，一種の「同一性の危機（アイデンティティクライシス）」に陥っているのではないか，との危惧を表明しておいた。（田丸 [1977]1987: 84）

* 東京大学大学院人文社会系研究科　教授

この言葉が示していたのは，宗教学（者）が共有するものは何かについての二つの見解の対立だった。本稿ではこれを A1⇔B1 とする。

A1　宗教学は「宗教」という対象の共通性によりつながっているが，方法は多様・学際的である。というのも宗教は文化・社会現象の一部でありその研究には人文社会諸科学の理論・方法論のどれを用いてもよいからだ。

B1　「宗教」という対象は独特なものであり，それを研究する宗教学の方法もそれ固有でなくてはならない（その方法を使わなくては宗教を理解することはできない）。

田丸は A1 を代表する宗教学者として Jacques Waardenburg，Ninian Smart，Walter Capps，B1 については宗教現象学者（Rudolf Otto，Joachim Wach，Gustav Mensching，G. van der Leeuw，Mircea Eliade）を挙げている(1)。

本稿では特に，この A1⇔B1 間の国際的論争の主要なプラットフォームになったのは IAHR だったということに注目する。宗教研究分野の国際学会としては他にも国際宗教社会学会（CISR，後の ISSR/SISR）などが活発に活動していたが，上記のような宗教学のアイデンティティ論争の受け皿は IAHR だった。IAHR の事務局長を 1971～75 年に務めた Eric Sharpe の古典的宗教学史，『比較宗教学――その一つの歴史』の初版（1975 年）は「20 年間の国際的論争――1950-1970 年」という章で終わっているが，その章は実質的に IAHR 史であり，その国際的論争とは宗教学の学としてのアイデンティティをめぐるものだった。

Sharpe の整理では，その論争は A1⇔B1 に重なるがやや焦点が異なる，次の A2⇔B2 をめぐって展開した。

A2　宗教学の存在意義は学それ自体にある。（宗教間）対話のような主観的・感情的カテゴリーを持ち込んではならない（純粋科学としての宗教学）。

B2　宗教学の目的あるいは存在意義は，諸宗教の協調のための宗教間対話である（応用科学としての宗教学）。

B2 のヴァリエーションとして，宗教学の目的を，全ての主要な宗教に共通する真理をとらえることとする「永遠の哲学 Perennial Philosophy」派への言及もある（Sharpe [1975]1986: 262）。

Sharpe によれば，1950～60 年代には A2⇔B2 の対立軸に，個別宗教史研究⇔マクロな比較研究，歴史的宗教の研究⇔現代宗教の研究，経験科学的宗教学⇔思弁的な宗教哲学・神学，専門主義⇔アマチュアリズム，ヨーロッパの宗教学⇔北米の宗教学といった対立軸が重なり合っていた(2)。1986 年刊行の同書第二版には 1970～80 年代の論争が続編として追加され

(1) 他に田丸が指摘する対立軸として，専門分化する歴史的研究⇔比較による総合的研究があり，これも後述の Sharpe の分析に共通する。また，田丸が論文末尾で強調する「宗教」の概念の問題としての「全体としての人間についてのある種のヴィジョン」ないし「人間学的構想」は，後述の A2⇔B2 の対立軸の基底にあるものである。

(2) これらの二項対立は論理的には一致していない。たとえば現代宗教の研究者＝哲学・神

ているが，社会科学への接近や構造主義などの新たな理論の導入はあるものの，これらの対立軸から大きな変化はないというのが Sharpe の状況分析だった。

A2 ⇔ B2
純粋科学⇔応用科学（宗教間対話）
個別宗教史研究⇔マクロな比較研究
歴史的宗教の研究⇔現代宗教の研究
経験科学的宗教学⇔思弁的な宗教哲学・神学
専門主義⇔アマチュアリズム
ヨーロッパの宗教学⇔北米の宗教学

その論争のなかでの IAHR の立場は，1960 年にマールブルクで開催されたその世界大会で，R. J. Zwi Werblowsky が起草した「（IAHR が推進する宗教学は何かについての）基本的な最小限の前提」という文書により示された。それは要約すれば次の 5 つの項目からなり，A1・A2 に一致するものだったが，B1・B2 側の Eliade を含む 17 名がこれに署名した。

1. 宗教学は歴史上の個々の宗教の特徴を理解することを目的とし，宗教の本性や機能について一般化する場合は科学的手続きを踏むよう注意する。
2. 宗教学は人文学の一つの分野であり，宗教現象を人間文化による創造物としてとらえる。
3. 宗教は超越的真理が現れたものだという見方を宗教学の基礎としてはならない。
4. 宗教学はその存在意義についての正当化を学の外に求める必要はない。
5. 宗教学者が，政治的なものにせよ宗教的なものにせよ，何らかの理念を組織的に推進することがあるとしても，それは個人的なイデオロギーやコミットメントによるものであることをわきまえ，IAHR の性格に影響を与えてはならない。（Schimmel [1960]2015: 82-83）

１の「科学的」には scientific の語が充てられているが，ここでは自然科学的という意味ではなく，思弁的ではない経験科学的・実証的アプローチを指している。

Eliade が J. Kitagawa，C. Long と雑誌 *History of Religions* を創刊し，B1・B2 の立場を強く打ち出したシカゴ学派のマニフェスト論文「新しいヒューマニズム」を発表したのはその 1 年後だった。宗教学者は世界の宗教・文化間の対話において積極的な役割を果たし，また宗教の内的意味の探究に取り組むべきであるとするその主張は，当時のアメリカの社会的要請に合致するものだったと Sharpe は指摘している。対抗文化期にさしかかるなか，学生が西洋近代の伝統である客観的な文献学よりも東洋の知をとりいれた実践的な（Sharpe の言葉では「実用的 utilitarian」）宗教学を求めるようになったと言う。シカゴ学派の解釈学的宗教学は，大学の顧客である学生の関心には近づいたが，それによって IAHR の理念からは離

学者ではないのは明らかである。自らを「科学的」とする A2 派が「非科学的」と呼ぶものに対してあてがってきたレッテルが B2 の諸項であると見るとわかりやすい。

れることになったというのが Sharpe の評価である（Sharpe [1975]1986: 280-281）。

これらの論争を踏まえての Sharpe 本人の立場は，A1 か B1 か，A2 か B2 かのどちらか一方のみを信奉し他を排除する教条主義に陥ることなく，宗教学を，「相互補完的な諸方法——歴史学的，社会学的，現象学的，哲学的，心理学的方法——が出会う場」（Sharpe [1975]1986: 293）として維持しようというものだった。これは田丸の前掲論文での「相対的自律性」「相対的客観性」の立場に近いものであった。

2. 21 世紀の変化——アイデンティティ・クライシスからポリティックスへ

田丸・Sharpe の状況分析から半世紀近くが経ったが，この間，宗教学はどう変化しただろうか。宗教学に限らず人文社会諸科学，さらに自然科学を含む学術全体という規模での変化は，社会への積極的関わりが求められるようになったことである。各国の科学アカデミーが加盟する国際科学会議とユネスコが 1999 年に共催した世界科学会議では，21 世紀の科学のあり方が議論され，それまでの「知のための科学」という理念に，「社会の中の科学・社会のための科学」という理念が加えられた(3)。その背景には冷戦構造の終結がある。冷戦中は大国の科学技術政策は軍事研究と基礎研究を振興したが，終結後は経済成長のための科学技術を重視するようになった。それに並行して地球環境問題も国際的な課題として浮上した。冷戦中は社会主義に対抗するために資本主義に歯止めをかける環境問題は国際的アジェンダになりにくかったが，それが一変し，リオ・地球サミットを経て，SDGs の前身である MDGs が 2001 年に国連により採択された(4)。経済成長のためのイノベーション政策も，持続可能な社会のための政策も，公共的課題の解決に研究者が貢献することを強く求めるようになったのである。宗教学を含む人文社会諸科学もこの政策的転換の中で，経済効率と不可分の社会的妥当性・有用性を求められるようになった。

この移行を背景とした宗教学の国際的論争の変化を一言で表すとしたら，アイデンティティ・クライシスからアイデンティティ・ポリティックスへとなる。これには二つの意味がある。20 世紀の A2⇔B2 対立については，ヨーロッパ，特に北欧では A2，北米やアジアでは B2 の宗教学者が目立つという地域による傾向はあったが，その違いは個人的な学問観，あるいはそれをとりまく学問文化からくるものと思われていた。それに対して 1990 年代以降は，A2 か B2 かは宗教学者が置かれた状況・ポジショナリティに関係するのであり，A2 は中立的で B2 が政治的なのではなく，A2⇔B2 自体がイデオロギー対立なのだとみなされるようになった。これが一つ目の意味である。二つ目の意味は，宗教的テキストや実践・組織の背後の権力作用を明るみに出し批判する研究が増えたことである。しばしば Paul Ricœur の言葉を借りて「懐疑の解釈学 hermeneutics of suspicion」と呼ばれるこの研究視点からは，20 世紀の宗教学者は A1⇔B1，A2⇔B2 のどちらに与しようとも，宗教に対して素

(3) “Declaration of the 1999 UNESCO World Conference on Science” https://worldscienceforum.org/contents/declaration-of-the-1999-unesco-world-conference-on-science-110056（2023 年 1 月 31 日閲覧）

(4) 報告『学術と SDGs のネクストステップ——社会とともに考えるために』日本学術会議・科学と社会委員会，2020 年 9 月 4 日発出 https://www.scj.go.jp/ja/member/iinkai/kanji/pdf24/siryo297-5-8.pdf（2023 年 1 月 31 日閲覧）

朴に肯定的だったとまとめて批判されるようになった。

どちらも，現実政治におけるアイデンティティ・ポリティックス（階級闘争ではなくジェンダー・人種・性的指向などを土台にした政治運動）や，学術におけるポストモダン／コロニアル理論など西洋近代を批判・相対化する諸理論の台頭に連動して起きた変化である。注意が必要なのは，そういった批判理論を適用するならば，A2⇔B2 対立に潜んでいた，「A2 は科学＝先進的＝西洋，B2 は非科学＝後進的＝東洋」という価値判断も反省される可能性があったが，欧米の宗教学の場合は批判理論が上記の懐疑の解釈学と結びついたことにより，B2 を宗教擁護の神学的宗教学（「レリジョニスト religionist」と呼ばれるようになる）として批判する傾向がむしろ強まった点である。これが純粋科学を志向する A2 派による神学批判に合わさり，結果として新たな対立軸が浮上した。いささか単純化のきらいはあるが，以下のように整理することができる。

Sharpe 後続世代の宗教学者，特に B1 と B2 を「レリジョニスト」であり「本質主義」的であると批判する宗教学者を A3 とする。A3 は大きく三種に分類できる。まず，ポストコロニアル理論を展開した，Russell McCutcheon，David Chidester，Saba Mahmood，Timothy Fitzgerald 等（A3-1）。宗教と宗教学の政治性，抑圧構造を問題化する研究者たちである。第二に，自然科学をモデルとする認知科学系宗教学を推し進めた，Armin Geertz，Luther Martin，Donald Wiebe，E. T. Lawson 等[5]（A3-2）。第三に，従来の実証的な歴史学的・文献学的研究を守ろうとする，Tim Jensen，Einar Thomassen，Jörg Rüpke 等（A3-3）。神学の権威に抗して築いた宗教学の伝統に立つ，主にヨーロッパの研究者たちである。

学会組織としては，A3-1 と A3-2 は北米宗教学会（North American Association for the Study of Religion, NAASR），A3-3 は IAHR の地域学会の一つであるヨーロッパ宗教学会（European Association for the Study of Religions, EASR）に多い。より正確には，EASR でも A3-1 や A3-2 研究は盛んだが（ヨーロッパの宗教学者も NAASR の学会誌 *Method & Theory in the Study of Religion* をよく参照している），相対的に A3-3 を重視しているというのが特徴である。NAASR と EASR には共通のライバル学会があり，それが B2 派が相対的に多いだけでなく，世界最大規模の宗教学の学会を毎年開催するアメリカ宗教学会（American Academy of Religion, AAR）である。2017 年には AAR を模した，B2 の宗教学者や神学者を多数含むもう一つのヨーロッパ宗教学会（European Academy of Religion, EuARe）が発足し，EASR と競合している。A3-1～A3-3 内部の関係については，対立は皆無ではないものの[6]，コラボレーションも見られる。

---

[5] 認知宗教学の代表的研究者としては，P. Boyer，H. Whitehouse，D. S. Wilson など多くの名前が挙がるが，狭義の宗教学出身で，IAHR をはじめとする国際的宗教学会に継続的に関わっているのは特に Geertz，Martin，Wiebe である。

[6] たとえば Wiebe と McCutcheon の相互批判については（McCutcheon 2015: 140-141）参照。Ivan Strenski と Armin Geertz の論争も，A3-1 と A3-2 間の対立である。Strenski は認知科学系宗教学者の「宗教」や「科学」の定義が旧態依然のものであり，何よりも研究として面白みに欠けると批判し，それに対して Geertz は Strenski の批判は認知科学に関する無知からくるものだと反論している（Strenski 2018, 2019; Geertz 2020; Testa 2019）。

A3-1　批判理論（ポストコロニアル理論）系…NAASR
A3-2　認知科学系…NAASR
A3-3　実証的歴史学・文献学系…EASR
NAASR⇔AAR　　EASR⇔EuARe

A3-1～A3-3 はいずれも欧米発の潮流だが，これにアジア・アフリカ・ラテンアメリカの宗教学者が加わると第一の意味でのポリティックスが顕在化する。非欧米圏の開発国では，分野を問わず社会的課題を解決するための応用科学がより必要とされる。また神学の権威に対抗しながら宗教学が制度化したヨーロッパ（特に北欧やイタリア）とは異なり，神学と宗教学を厳格に分離する学問的・制度的必要性が強くあるわけではない(7)。その視点からは，研究者の社会参画を中立・客観的な学からの逸脱と批判し，学はそれ自体として存在意義があるとする A2 の立場は，ヨーロッパの宗教学のみを真の（科）学として認めるヨーロッパ中心主義にほかならない。このような位置にあるアジア・アフリカ・ラテンアメリカの勢力を B3-1 とする。

先進国でも北米やオーストラリアでは，社会問題に関わるアクティビズム的性格の強い宗教学が盛んである。AAR にそのような宗教学者が多いことは知られているが，カナダ宗教学会もたとえば 2023 年の年次大会のテーマを「ブラック・ライブズ・マターや……行方不明になったり殺害されたりした先住民女性についての政府調査，といった教訓から，2023 年の大会は，私たち人間が互いの違いを尊重する，ヒエラルキーのない社会において，環境を保護しつついかに生きていくかについて，新たな見通しを得ることに焦点を絞る」という，社会参画度の強いものに設定している(8)。先住民問題に関わる社会科学系の研究はオーストラリア宗教学会にも当然のこととして組み込まれているが，その HP の冒頭では，当学会が宗教学（Religious Studies）だけでなく，哲学，神学を含むことを謳っている。これら北米・オーストラリアの社会参画型宗教学を B3-2 とする。

A3-1　批判理論系…NAASR
A3-2　認知科学系…NAASR
A3-3　実証的歴史学・文献学系…EASR

B3-1　開発国・社会参画系…アジア・アフリカ・中南米
B3-2　先進国・社会参画系…北米（AAR），オーストラリア，EuARe

（この対応関係は学会が自認する相対的アイデンティティによるものであり，実際には AAR 会員にも A3-1～A3-3 派は多数含まれる）

(7) タイの宗教学の哲学との近さについては（矢野 2020），ブラジルについては（Fujiwara, Thurfjell & Engler 2021: 20-21），アフリカについては（Cox 2006: 156-157）。
(8) Canadian Society for the Study of Religion (CSSR)の HP より。
https://www.cssrscer.ca/sites/default/files/CSSR_CFP_2023_Dec15_2022.pdf（2023 年 1 月 31 日閲覧）

B3-1・B3-2 は B2 の学問・科学観を，A3-2・A3-3 は A2 の学問・科学観を継承している。A3-2・A3-3 派は，純粋科学のみを真の（科）学とみるのはヨーロッパ中心主義であるという B3-1・B3-2 派からの批判に対して，いや，1＋1 の答えは世界どこでも 2 であるように，純粋科学は普遍的だと反論してきた。あるいは，神学と宗教学を分離しないのは，占星術と天文学を区別しないようなものである，ヨーロッパだけでなくどこの国の科学界でも占星術は科学として認められていないのだから，神学と宗教学の分離もヨーロッパ特有というわけではないと論じてきた。

3. 21 世紀の IAHR における対立の構図

そのような反論，すなわち A2 の学問・科学観は普遍的だという主張に対して，パラダイム論や現代物理学理論を引き合いに出し，近代科学は絶対的真理というわけではないと再批判することは，科学論的には可能である。しかしそのような批判に対しては「A2 以外にも「科学」があると主張するのは構わないが，そう考える人たちとは交流できない」という断交宣言が A3 の諸陣営から返されてくる。神学者を入れ，宗教間対話を目ざす実践的宗教学者たちは，他の学会に行けばよいということだ。

まさにその種の意見対立を繰り返してきたのが IAHR である。IAHR 内の A3-2・A3-3 派は，IAHR は科学内在的な（宗教的・政治的目的から切り離した）実証的研究としての宗教学のための組織である，それは 1960 年の Werblowsky 文書以来の伝統であると言って譲らない。純粋科学は普遍的だから，科学としての宗教学を世界に広めることは，ヨーロッパ中心主義や知の植民地主義にはあたらないと言うのである。IAHR 内の A3-1 派は，そのように近代科学を絶対視することはないが，A3-2・A3-3 と同様に神学やレリジョニストを徹底して排除しようとする。そのような A3 派を含む学会組織がアジアやアフリカに加盟学会を増やそうとすれば，摩擦が起るのは必須であった。レリジョニストを排除するのは，世俗主義という特定の立場であり，A3 派が科学の振興の名のもとに行っているのは世俗主義の押し付けである，西洋近代合理主義だけが合理主義ではないといった異議申し立てが IAHR 内の B3 派から出されてきた。以下ではこの対立の経緯を時系列に記す。

3-1 「マールブルク再訪」会議（1988 年）

A3-2・A3-3 派の見解は，世界のグローバル化が加速する 1990 年代直前に，IAHR の国際化戦略として当時の事務局長である Michael Pye によって明快に述べられている。これは宗教学のアイデンティティを議論するために 1988 年にマールブルクで開催されたシンポジウムを総括したものである。Pye が打ち出した方針は，国・地域によって学術と宗教情勢・文化の関係は異なるといっても，科学的な宗教学自体は普遍的なものであり，特殊西洋的というわけではないから，これを世界に広めていこうというものだった。この時は特に，イスラム圏や中国に IAHR が拡大することを目ざしていた。

Pye によれば，シンポジウム参加者の間では Werblowsky 文書に示された宗教学の基準が共有されていた一方，その基準を満たさない，すなわち B1・B2 派が多い地域にはイスラム圏の他，北米，日本，ヨーロッパ内のカトリック圏やドイツ，社会主義圏がある。イスラム

圏では複数の宗教に対するアプローチは宗教間対話的になるが，同様のエキュメニズム・モデルはドイツでも依然として強い。特にカトリックが強い地域では，キリスト教神学と宗教に批判的な社会学との対立が鮮明になりやすく，その例が（ヨーロッパのカトリック圏から立ち上がった）国際宗教社会学会 （CISR）で起こっている内部対立である。CISR ではその対立のため，経験科学的宗教学の居場所が失われつつある。南米にも同様の対立がある。

Pye はこのように諸地域の現状分析を行いつつ，しかしそれらの地域に A2 の宗教学を拡大することは新たな帝国主義ではないという。B2 派の多い日本にも，富永仲基といった西洋の影響を受けずに合理的な宗教研究を行った例があるように，A2＝西洋，B2＝非西洋という対応関係は存在しないからだという。

> 非規範的な学術的宗教学は新たな帝国主義的陰謀の類ではない。筆者はちょうど，日本人による最初の主要な客観的宗教史研究の書を英訳したところだ。それは 18 世紀前半に生きた富永仲基によるものだ。富永は，ヨーロッパ啓蒙主義の子，いやその創始者のひとりになりえた学者だが，彼は日本人だったのだ！　富永の例は，宗教に対する歴史学的・理論的研究が普遍的に妥当であることを示す根拠として最適なものであり，（非規範的宗教学の推進は）文化的帝国主義であるという糾弾を恐れる必要はないのである。（Pye [1989]2015: 113-114）

3-2　東京大会（2005 年）

この見解に対して異議をつきつけたのが 2005 年に東京で開催された IAHR 世界大会だった。もっとも，大会に参加した日本の宗教学者の大半にはそのつもりはなかったかもしれない[(9)]。大会主催者ですら，論争に参入するというよりも回避するという意識だったことが窺われる[(10)]。

> 今大会では方法論をめぐる緊張関係［本稿の A1⇔B1，A2⇔B2 に該当］が，現代宗教研究の主要問題だという理解は，明らかに周辺的なものになっていた。宗教に関わって社会が問いかけている諸問題に，主体的な信仰的立場から，教典や宗教思想書を読み込んで解釈学的に取り組もうが，科学的な諸手段を駆使して取り組もうが，その姿勢の相違自体に重大な意義を付与する必要は必ずしもないのではなかろうか。……問いかけられている問題に応答しようとする実践的な関心こそが重要であり，方法論の原理的

(9) これには筆者も含まれる。当時，日本宗教学会の一般の会員には IAHR 内の論争の経緯は十分に認識されておらず，むしろ IAHR はソフトな宗教派の組織であるというイメージの方が強かったかもしれない。何と言っても B1・B2 派の宗教現象学者，G. van der Leeuw を初代会長とする学会なのだから，若手研究者にとっては「古き良き宗教学」の団体であり，関心も持ちにくかった。

(10) あるいは，この文章を額面通りとれば，対立点は，解釈学的方法か客観的方法か（対象内在的な理解の学か，還元的な説明の学か）の違いだけであると主催者はとっていた。しかし，それは A1⇔B1 対立の方（のヴァリエーション）であり，対立軸には A2⇔B2 という純粋科学と応用科学の対立もあったのである。東京大会のテーマはこの B2 にあたるものだった。

な対立にこだわり続けることがそれほど大きな意義をもつとは思われないのであった。（島薗 2008: 2-3）

このように考えた主催者は，大会のテーマを 9.11 以降の宗教と人間のゆくえを問うという趣旨で「宗教――相克と平和」に定めた。

しかしこの戦略は，A3 のどの陣営からも，日本の宗教学者は加盟学会の合意抜きに IAHR の路線を B2 へ変更しようとしたと受け止められた。その波紋について，大会主催者は，IAHR の理事会で，「東京大会の討議の方向性に小さな疑問符」が投げかけられた（島薗 2008: 2）と記録しているが，それは過小評価である。東京大会を契機に，B2 派への警戒を強めた IAHR の役員会は，A2 路線を固定することを一つの理由として会則変更に至った。

その会則変更は 2010 年のトロント世界大会で総会の承認を受けた。それは会則の第 1 条「IAHR は宗教の学術的研究を目的とし，これに関する研究に従事する学者たちの国際的協働を通してその実現を図る非営利の世界的組織である」という文章の後に，「IAHR は信仰告白的，護教的，その他類似の関心のためのフォーラムではない」という一文を付け加えるものだった。「信仰告白的 confessional」とは，「護教的」とともに，神学的であること，レリジョニストであることを指す。この時の役員会には，アフリカをフィールドとする宗教人類学者でジェンダー平等に関してもアクティブな Rosalind Hackett も入っていた。すなわち，B3-1 の理解者であり，さらには自らもその立場から発言することのある役員（しかもこの大会中に会長に選出された）もこの会則変更に賛同したのである。変更を審議したトロント大会中の理事会（International Committee Meeting）でも，特に誰からも疑義は出されなかった。これは，同じ審議において，会則に役員選出などに際してジェンダーや地域のダイバーシティを考慮することを新たに盛り込むことも提案されていたため，それと「神学お断り」条項をセットで決議することが，A3 派と B3 派の双方の落としどころになったためと考えられる。

3-3　デルフォイ会議（2019 年）

ともあれ，会則に新たな一文が加わったことで，その後の IAHR の活動はどうなっただろうか。筆者は IAHR の役員を 2010 年から務め，2 期目[11]の 2017 年から事務局長を代行した。2 期目の役員会は Tim Jensen 会長のイニシアティブにより，以上の経緯を踏まえて IAHR の活動をふり返り，今後の方針を改めて討議し，その結果を理事会と総会に報告・提案することを企図した。そのための役員会は，通常それを構成する執行委員（Executive Committee members）のほか，IAHR 元会長・事務局長，世界大会の開催主催者，学会誌 *NVMEN* の編集委員長を招いた拡大役員会として，2019 年 9 月に開催することになった。同様の回顧と展望は 2000 年のダーバン世界大会に向けても行われており，それから 20 年の間の IAHR の活動を総点検する機会とすることが目ざされた。

拡大役員会の討議のキーワードには「グローバル化」を選んだ。必ずしもよい印象を喚起しない言葉であることを承知の上で，しかしこの言葉は IAHR が直面する二種類の課題を

(11) 役員の任期は 5 年，再任可能である。

表現する上で適切であると考えたのである。すなわち，IAHR 自体が世界へ拡大する上での課題と，経済的グローバル化の IAHR への影響から生じる課題である。以下に拡大役員会の趣旨文を要約する。

1．IAHR のグローバル化

1988 年のマールブルク会議で目ざされた，西欧・北米以外の地域に IAHR の加盟学会を増やし，役員会の構成などについて地域バランスを考慮するという目標はどの程度達成されただろうか。

また，単に諸地域に会員を増やすだけでなく，それらの地域で IAHR の学会を開催する際に，会則第 1 条に追加された一文は十分に考慮されただろうか。

あるいは，IAHR のアイデンティティについて現役員が合意する上で，1960 年の Werblowsky 文書はなおも有益な出発点になるだろうか。

2．IAHR へのグローバル化の影響

ネオ・リベラリズムの市場主義としての経済的グローバル化は，人文社会科学全体に対する脅威となっている。IAHR 加盟学会へのその影響はどのようなものか。宗教学は拡大しているのか縮小しているのか。社会的に「妥当な」宗教学だけでなく，伝統的な文献学や古典学を，IAHR の宗教学者は協力して維持することができるか。

宗教学はもちろん，人文社会科学一般を振興するだけでなく，現在の社会的課題に対して価値ある取り組みをすることができる。だが，IAHR「自体」は，人権や文明間対話や平和を促進するために存在するわけではないという会則第 1 条を維持しつつ，そのような取り組みをすることはできるだろうか。

さらに加えれば，グローバル化により人の往来がより容易になった結果，IAHR のような伝統的な国際学会以外にも，宗教学者の国際交流の場は増加している。そのような状況下で IAHR の存在価値をどう新たに作り出すことができるか。

グローバル化はまた環境問題への意識も高めている。CO2 削減のために飛行機を利用した国際学会への参加は控えたいという要求にどう対応していくか。(12)

まとめれば，1 の意味でのグローバル化により，アジア・アフリカ等の B3 派の宗教学者が IAHR 内に増加し，他方，2 の意味でのグローバル化により，A2 を推進してきた西欧においても社会的課題に取り組む宗教学が外から要請されるようになったという状況で，会則追加文の方針をどう徹底するのか，あるいはむしろ現役員会は，Werblowsky 文書を出発点とすることを自明としてよいかが，会長と筆者が拡大役員会にまず向けた問いだった。これらの大きな問いを，世界大会や地域学会の企画・運営，役員会の新たな職務，新たなメディアの活用，財務計画，出版事業などについての具体的な改善案に落とし込んでいくことを考えていた。

(12) Tim Jensen, Satoko Fujiwara and Philippe Bornet, “Suggested Main Themes and Reading Resources,” 2019.　会議資料として IAHR 加盟学会には共有されている。

さらに筆者は，数日の会議で結論を引き出すには役員側でたたき台を予め用意する方がよいと考えた。会議を始めれば，A3 派と B3 派が対立し，合意には決して至らないと予想できた。そこで A3 派的な IAHR の将来プラン，B3 派的なプランを両方構想し，それぞれを拡大役員会で鍛え上げ，どちらにするかは 1 年後の理事会・総会で決定すればよいだろうと考えたのである。会長をはじめ役員会の了解を得て，この案に関心を示した 3 名の役員，Ann Taves（アメリカ），Philippe Bornet（スイス），David Thurfjell（スウェーデン）とともに，三パターンの IAHR の将来像を考えた。抽象的な議論に終始しないよう，2025 年の世界大会はどうあってほしいかという具体的なヴィジョンを定めることにした。そして 3 パターンのそれぞれについて，それに至るために行うべきことをバック・キャスティング的に列挙した「シナリオ」を作成した[13]。

まず，現状把握として，IAHR の世界大会や地域大会には，会則追加文に反する「信仰告白的」「護教的」な研究発表も一定数含まれていることを確認した（発表のアブストラクトは申込の段階で審査を受けるが，会則を変更した 2010 年後も神学性ゆえにリジェクトされることは必ずしもなかったのである）。A3 派の多くはそのような発表を聞くことはなく，他方，そのような発表をする研究者は，自分の研究が会則に反するとは思っていない，つまり，A3 派と自分の研究の違いに気づいていないと推測できた（そうでなかったら，つまり気づいていたら，IAHR の大会には参加しないか，自分の研究が排除されることについて異議を申し立てているだろうと考えられるからである）。

そのような現状をそのまま続けた場合の 2025 年の状況を「シナリオ①（現状モデル）」とした。つまり①に従った 2025 年大会には，宗教学の A3 派も B3 派も含まれるが，その違いは依然として潜在的なものに留まることになる。続いて，現状維持ではなく積極的に改革するが，その方向性を異にするシナリオ②と③を作成した。

「シナリオ②（排除モデル）」は，IAHR の会則第 1 条を，近代的経験科学という意味での科学的な宗教学のみを認めるものと解釈し，その解釈に基づき，すべての信仰告白的研究や，経験的データに基づかない思弁的研究を排除するプランである。

それに対して「シナリオ③（包摂モデル）」は，A3 派も B3 派もいるという複雑な現状を維持するが，その違いをあえて可視化し，それについてオープンかつ反省的に議論することを目ざす。ポストモダニズム，ポストコロニアリズム，ポストセキュラリズムなどが席巻した後の学界で，何が科学で何が科学ではないかについての，公認されうる基準はあるのか。*NVMEN* は何を基準に論文を査読すればよいのか。さまざまな地域出身の院生に対して，論文や研究の組み立てについてどのように助言すればよいのか。このような議論に参加者を巻き込むことを前提に，シナリオ③はさまざまな背景や学問的アイデンティティをもつ研究者を受け入れる。というのもシナリオ②では，経験的宗教学と神学を峻別しない地域で教育を受けた研究者が IAHR に関わることはなくなり，結果的に IAHR が諸地域に広がることはきわめて困難になるからである。

続いて，各シナリオについて，それに合う IAHR の新名称，地域学会の運営方法，加盟学

---

(13) Satoko Fujiwara, “IAHR Scenarios: 2020 and Beyond　Introduction to Otago International Committee members,” 2019.　会議資料として IAHR 加盟学会には共有されている。

会との連携方法，出版事業などについて青写真を描いた。IAHR の名称については，“History of Religions”では歴史研究のみの学会と見えやすいため，変えるべきだという議論が 1960 年代から始まり，変更案が度々検討されるという長い経緯があった。過去の変更案を参照し，シナリオ①は IAHR のまま，②は International Association for the Historical and Scientific Studies of Religion，③は International Association for the Study of Religion(s)をたたき台とした。シナリオは 10 ページの長さになり，前もって役員内では回覧し，意見を聴取したが，役員外の拡大役員会のメンバーには事前の送付を控えた。これは役員内で案件に関する検討がすでに終わっているという印象を与え，参加モチベーションを下げることのないようにという配慮からだった(14)。

---

(14) 会議に先立ち，筆者はもう一つの準備作業を行った。IAHR の歴史を知るほどに，1960 年の Werblowsky 文書について謎が深まった。なぜシカゴ学派の Eliade，Kitagawa，Long が署名したのか。またこの文書はその時の総会で正式に採択されたのか。いずれも議事録（Schimmel [1960]2015）には書かれていなかったのである。そこで，17 名の署名者の内，ただ一人存命中だった Long に問い合わせることにした。ちょうどその前年に，宗教現象学史についてのインタヴュー集を作成するプロジェクトのために，Long とかつて Long に習った Eric Ziolkowski からインタヴューの協力を得ていたため，依頼しやすい状況だった。Ziolkowski は Long に電話し，聞き出したことを筆者にメールしてくれた（それは会議の前日に届いた）。

それによれば，Werblowsky の文書は，総会に提出されてその場で 17 名が署名したというものではなかった。総会前の午後，Long が Eliade，Kitagawa とともにカフェで休憩をとっていたところ，Werblowsky が突然，文書案を手に現れ，署名してくれないかと持ちかけた（その文書についてはそれまで全く話に出たことはなかった）。そこで 3 人はざっと目を通し，「ああ，別にかまわないよ」と署名した。大したことじゃないと思ったからだという。文書は議事録に記され，後にひとり歩きを始めたが，3 人にとっては何ら重要なことではなかったのだというのが Long の回答だった。

さらに Long は当時のアメリカから IAHR がどう見えていたかについても語った。Long たちにとっては IAHR 自体が「古臭いヨーロッパのもの old European thing」にすぎず，関心はなかった。それなのにマールブルク大会に参加したのは，その前年に米国学術団体評議会（the American Council of Learned Societies）がシカゴで開催した会議をきっかけに，IAHR の大会への参加費用を提供してくれるようになったからである。それによって参加したのは 3 人のほか，Talcott Parsons や E. R. Goodenough だった。折しも American Society for the Study of Religion が立ち上がり，それが IAHR の加盟学会になった。

マールブルクに行く際，Long たちはシカゴ大学 Divinity School から出版する *History of Religions* の創刊号のファクシミリ版を持参した。これには IAHR 側の C. J. Bleeker 事務局長や他のヨーロッパ人は冷ややかな態度を示した。宗教史学の国際雑誌は IAHR の *NVMEN* だけだと激怒したというのである。Bleeker たちは宗教史学をヨーロッパのものにしておきかったため，アメリカの参入を脅威と受け止めたのだ。その背後には，戦後の状況，マーシャル・プランを経験したヨーロッパ人が，ヨーロッパの権威ある諸組織をアメリカに奪われると恐れていたことがあると Long は指摘した。つまり，Bleeker や Werblowsky は彼らとシカゴ学派の対立点を方法論上のものとして見せようとしたが，実際には政治的対立だったのだというのが Long の見解だった。

署名者の一人による，50 年後の回顧であるとはいえ，Werblowsky 文書が総会で正式に承認されたわけではないことがわかる。実際に，事務局長の Bleeker はそれに不満を示していたし，議事録を見る限りは，その文書の解釈も，参加者の間で一様ではなかった。インドから参加した Swami Bon Maharaj などは，B2 を排除する文書とは全く受け取って

拡大役員会は 9 月 13〜15 日にギリシャ・デルフォイのヨーロッパ文化センターで開催され，20 名[15]が参加した。蓋を開けると，会議の主導権を握ろうとしたのは A3-2 の Wiebe だった。彼は最優先すべき議題は IAHR の名称変更だと主張した。進行役の筆者と会長はこれを受け入れたが，というのも名称については比較的短時間で議論が終わるだろうと踏んだからだった。ところが議論は延々と続いてしまったのである。

初日は IAHR のグローバル化を主導した元執行部の Pye と Geertz が短い講演を行い，続いて，事前にポジション・ペーパーを提出していた Wiebe[16]と Taves[17]がプレゼンテーションを行った。Wiebe の内容は，IAHR のアイデンティティは A2 であり，グローバル化しようが何をしようがそれを変更してはならないこと，また名称変更はこのアイデンティティ問題に直結すること，つまり彼が数十年間一貫して訴えてきたことと同じだった。それに対して Taves の内容は，議論の皮切りとして，Werblowsky 文書をこの会議の出発点として良いかと会長が問いかけたのに応じるものだった。Taves は，それは科学的宗教研究の「科学」や「宗教」とは何かという問題であり，どちらもこの半世紀の間に 1960 年の時点ほど自明ではなくなったのではないかと論じた。

二人のプレゼンテーションの後に全体討議が行われたが，A3-2・A3-3 派が基づく A2 のみを唯一の「科学」とするのか，科学の複数性を認めるのか，あるいは科学論的には後者を選ぶとしても，IAHR 内の基準はどうするのかをめぐって議論は平行線のままヒートアップした。Wiebe は IAHR がグローバル化によって疑似神学学会と化したと嘆き，アジアやアフリカの学会，さらには AAR を追い出すことになったとしても，IAHR は科学主義を守るべきだと主張した。これに対しては当然のことながら，ヨーロッパ中心主義であるという批判，すなわち西洋啓蒙主義が生み出した科学は普遍的であり IAHR が基づくべきものであるとする科学観は偏狭であり，科学論・学問論的にも単純であるという反論が，アフリカ宗教学会の Bongmba 会長[18]等から出された。

いなかったことが窺われるのである（Schimmel [1960]2015: 84）。また Long の回答からは，その時代の論争も，IAHR に対して周縁的なポジションにある彼（アフリカ系アメリカ人）から見れば，すでにアイデンティティ・ポリティックスだったことがわかる。

(15) Tim Jensen (現会長)，Veikko Anttonen (現副会長)，藤原聖子(現事務局長代行)，Ann Taves (現副事務局長)，Philippe Bornet (現会計)，Milda Ališauskienė (現役員)，Amarjiva Lochan (現役員)，David Thurfjell (現役員)，Michael Pye (IAHR 元会長／事務局長)，Peter Antes (IAHR 元会長)，Rosalind I. J. Hackett (IAHR 元会長)，Armin Geertz (IAHR 元事務局長)，Yolotl González Torres (1995 IAHR 世界大会実行委員長)，鶴岡賀雄(2005 IAHR 世界大会プログラム委員長)，Donald Wiebe (2010 IAHR 世界大会実行委員長)，Christoph Bochinger (2015 IAHR 世界大会実行委員長)，Will Sweetman (2020 IAHR 世界大会実行委員長)，Gregory D. Alles (*NVMEN* 編集委員長)，Elias K. Bongmba (アフリカ宗教学会会長)，Panayotis Pachis (ギリシャ宗教学会会長)

(16) AAR の神学性を批判し NAASR を立ち上げた，トロント大学の宗教学者。

(17) シカゴ大学の宗教学（History of Religions）出身だが，認知科学系宗教学の担い手の一人であり，レリジョニストではない。UC サンタバーバラで教え，AAR 会長を 2010 年に務めた。

(18) カメルーン出身，現在は米国ライス大学宗教学科教授。AAR の Ray L. Hart 賞などを受賞。

二日目は朝から口論が身体的暴力へとエスカレートした。会議参加者はほぼ全員が同じ宿舎に泊まっており，寝台が硬く眠れなかった筆者は 6 時半に食堂に行った。そこには既に Wiebe とギリシャ宗教学会の Pachis 会長が来ており，すぐに Bongmba も加わった。Wiebe と Bongmba は議論を再開し，ついに殴り合いを始めた。罵り言葉を使いながら喧嘩する学者を見るのは初めてだった筆者があっけにとられていたところ，Wiebe が手を休めることなく筆者の方を振り向き，「みろ，これがグローバル化の結果だ！」と挑発してきたため[19]，我に返り，仲裁をしてもらうために会長を呼びに行った（ホスト役の Pachis は Wiebe に加担し口論に加わっていたのである）。

怒りのあまりに直ちに帰国するという Bongmba をなんとか説得し，二日目の会議が始まった。初日の展開は役員会としても予想しており，意見は異なれど共同作業を行えるよう準備していたことを示すために，そこで「シナリオ」文書を筆者から提示し，説明した。だがこれは A2 以外の路線を役員会が予め想定していたことを示すものだと Wiebe からすぐさま攻撃された。彼を抑えるという目的もあって，その後の議論では彼の望む名称問題を議題とした。“Study of Religions”支持者と“Science of Religion”支持者がほぼ半々だったため，議論は終わらなくなった。

とはいえ，名称問題を議論する過程で，シナリオ②と③の利点と欠点について十分に意見を交換することができた。これを受けて，拡大役員会に続いて開催された現役員会では，落ち着いて問題を整理し，②と③を統合する形で 2020 年の理事会に提案する内容をまとめることができた。加盟学会との連携方法や出版事業などについても案が整ったが，特に主要な提案となる 3 点について，役員会報告として速やかに加盟学会に周知することにした。

1. IAHR の名称を International Association for the *History* of Religions から International Association for the *Study* of Religions に変更する。
2. IAHR の会則第 1 条「IAHR は宗教の学術的研究を目的とし，これに関する研究に従事する学者たちの国際的協働を通してその実現を図る非営利の世界的組織である」の「学術的研究」の表現を“the *academic* study of religions”から“the *scientific* study of religions (*Religionswissenschaft*)”に修正する。
3. 世界大会以外の IAHR の諸学会（加盟学会が開催する IAHR 地域大会など）においても IAHR の役員が 1 名以上組織委員会に加わる。[20]

1 点目は，“Science of Religion”よりもインクルーシブな“Study of”に，しかも Religion を複

---

[19] 不覚にもこの時は気づかなかったが，Wiebe の態度とこの言葉は，それだけ切り取ってみれば，ゼノフォビアの白人ナショナリストのやることと何ら変わりはなかった。グローバル化によりアフリカ人が自分のテリトリーに入り込んできて，大切にしてきたものを奪おうとしているというわけだから。後述のように，Wiebe は拡大役員会の後，IAHR の名誉会員を辞任するのだが，先にこちらから名誉会員資格を剥奪すべきだったと後で後悔した。学術団体の倫理規範に反するだけでなく基本的な人権の侵害とも言える言動だった。

[20] The IAHR e-Bulletin Supplement, November 2019. https://www.iahrweb.org/bulletins/IAHR_e-Bull_Suppl_Nov_2019.pdf

数形にすることにより，さらにダイバーシティを可視化するという考えである。ただし，名称変更に関するこれまでの議論を踏まえると，“Study of Religions”案を採用するならば，神学をも包摂し，経験科学としての宗教学のアイデンティティを保てないという反対意見も多くあがることが予想された。このため，2 点目を同時に提案することにしたのである。会則の中に“science”の語を入れることにより，A3 派の警戒心をとき，同時に，その場合の“science”とは自然科学限定ではなく学術という意味であることを，“Religionswissenschaft”の語を添えることで，自分を“scientist”とは思っていない宗教学者の理解を得ようとしたのである。

過去においては，名称変更案が理事会を通りさらに総会に提出されたのは，1995 年のメキシコシティ世界大会時のみである（その時は総会にて否決）。2015 年にも変更案が数人の IAHR 名誉会員と会員有志によって出されたが，その時は役員会がこれを支持せず，理事会でも同様だった。それに対して今回の変更案は役員会自らの提案であるため，かなりの高い確率で理事会・総会でも賛同を得ることが予想された。そこでバランスをとるために，制限なくインクルーシブにするわけではないという役員会の意図を，2・3 点目を加えることで明確化したのである。

だが，この役員会報告を加盟学会に送付するよりも早く，Wiebe から役員会への抗議文とともに IAHR の名誉会員を辞任するというメールが届いた。IAHR の名誉会員資格は IAHR に対して特に貢献の大きい会員に贈られるもので，加盟学会や役員会が推薦し，理事会が承認することで決定する。Wiebe の抗議は，役員会が IAHR の路線を Werblowsky 文書以来の A2 から神学を入れた規範的研究に勝手に変更しようとしている，その決定はデルフォイの拡大役員会前にすでになされており，会議は形だけだったという内容だった[21]。言ってみれば“役員会陰謀論”を唱えたのである。

本人から名誉会員辞任の願いが出されれば受理せざるをえないため，遺憾を表しつつこれを受け，加盟学会に上記の提案を知らせる会報には，これについても記載した。だが，Wiebe からの批判は 1 回では終わらず，度々のメールによる攻撃の後は批判内容を論文（Wiebe 2020），さらに 1 冊の本『厳密な科学的宗教学の擁護論――デルフォイでの論争』として出版した（Wiebe 2021）。論文は *Method & Theory for the Study of Religion* に掲載されたが，編集委員から会長と筆者に応答論文を同じ号に寄稿しないかという誘いがあったため，これを受けた。その論文では，拡大役員会の目的と討議の結果を説明し，Wiebe の“役員会陰謀論”は根も葉もないこと，また，役員会の上記３提案については，理事会と総会での審議と投票抜きには決定しないことを強調した（Fujiwara & Jensen 2020）。

しかしこの攻防が続く最中に起こったのが新型コロナウイルスによる世界的パンデミックだった。2020 年 8 月に予定されていたオタゴでの IAHR 世界大会が中止になり，大会中に開催されることになっていた理事会もとりやめざるを得なかった。名称変更や会則修正はオンラインの理事会で審議し決議するにはあまりに重要な問題だったからである。8 月末にオンライン投票により役員の改選のみが行われ，Jensen 会長は再任され，筆者は事務局長に就任した。

---

(21) これらの書簡も会議資料とともに加盟学会には共有されている。

役員会が新体制となったため，名称変更案と会則修正案は仕切り直しになった。同じ案を次の理事会（2023 年開催予定）に提出することは新役員会がそうすることに決めれば可能だった。だが，再任された役員を含め，新役員会はそれには積極的にはなれなかった。一つには，コロナ禍という未曽有の世界的危機の中，加盟学会は IAHR の名称問題などにはほとんど関心をもたないだろうと考えられたこと。もう一つは，前期にこれらの案を積極的に進めていた再任役員たちは，筆者を含めて，Wiebe からの執拗な攻撃に閉口していたということがある。名称問題は今期においてはイシューではないというのが新役員会の共通認識となった。

3-4　ロシアのウクライナ侵攻に対する役員会声明（2022 年）

ところが，IAHR のあり方を根本的に問うことになるもう一つの出来事が 2022 年 2 月に起きた。ロシアによるウクライナ侵攻である。侵攻開始直後，IAHR 執行部（会長・事務局長・会計）は 3 人の名でウクライナ宗教学会会長に向けて事態に対する憂慮と連帯の意を示すメールを送付した。他方，役員の中から侵攻を止めるための強い措置を含む役員会声明を至急発出したいという要望が出された。そこで翌日（2 月 27 日）に緊急のオンライン役員会を招集し，その要望について話し合うことにした。

急な会議だったため，12 名の役員中，出席できたのは 7 名であり，オーストラリア人の役員と筆者以外はヨーロッパ人だった。執行部からは，まず上記のウクライナ宗教学会宛のメッセージを加筆修正した上で，IAHR 全加盟学会に送付し共有することを提案した。これを他の 4 名は「弱腰」と詰り，ロシアへの非難，ロシア人宗教学者への制裁，ロシアとの関係の遮断を含む内容の声明を出すことを求めた（原語全文は本稿末尾に掲載）。

a) IAHR とその加盟学会は，ロシア宗教学会をはじめとする，ロシアにつながりのある／ロシア政府から資金援助を得ている団体や研究所との関係を断つ
b) ロシアの宗教学者が IAHR 関連の学術大会に出席する場合は，ロシアの何らかの機関に所属する者としてではなく，個人としての参加であることをその条件とする
c) ロシアの宗教学者が IAHR 関連のジャーナルに論文を投稿する場合は，ロシアの何らかの機関に所属する者としてではなく，個人としてであることをその条件とする
d) IAHR とその加盟学会の会員は，ロシアの国家機関から資金を得ているジャーナルには論文を投稿しない

a)～d)を IAHR としても実施し，加盟学会にもそのようにすることを推薦する。

感情の交じる議論が 3 時間続いた後，役員全員にメールし，この 4 名が起草した役員会声明を発出するかどうかについて 16 時間以内に匿名で投票を行うことに決定した。筆者は欠席した役員を入れもう一度会議を開くことを提案したのが，4 名は反対した。1 分 1 秒でも早く出さなければその間にキーウが陥落するかもしれず，そうなれば声明の意味がなくなるからというのが理由だった。

結果は，発出に賛成 6 名，反対 1 名，棄権 4 名，投票せず 1 名となり，賛成意見が有効票の過半数となったため，発出が決定した。そこで筆者は事務局長として，IAHR 全加盟学会

と名誉会員にこの役員会声明をメール送付することになった。しかし，そのまま出すことは躊躇われた。IAHR はそれまで，政治的な声明は役員会名であろうが理事会名であろうが，一度も出したことはなかった。この声明を出すことは，1960 年の Werblowsky 文書に反しており，IAHR 史上の大きな転機になることは明らかだった。そのような重大な方針転換は役員会の一存では決められないということを，会長と筆者は前述の Wiebe に対する応答論文で強調したばかりだった。政治的であるだけでなく加盟学会にも制裁措置をとることを求めるこの声明を出すならば，IAHR の少なからぬ数の会員から役員会が信用を失う可能性があった。他方，役員会としても合意形成にはほど遠く，いくら会議は定足数を満たしており，投票は多数決だといっても，3 時間の議論の内容を欠席した 5 名に知らせる間もなく採決したことは，筆者の目からは民主的とは言い難かった。

そこで苦肉の策として，役員会声明を発出するが，投票結果を添え，さらに会長と事務局長は棄権したこととなぜそうしたかの説明を加えることにした。声明は独立した pdf ファイルの形式で送り，投票結果や説明はメール文のみに記すことにした。これによって，受け取った各加盟学会の執行部は，それぞれの判断で，声明のみを会員と共有し，a～d の措置をその学会としてもとることができるし，まったくそうしないこともできるようになった。もちろん，そのようなことをすれば声明案を推した 4 名の役員からは「裏切られた」と恨みをかうことは目に見えていた。その結果，執行部不信任案が理事会に出されることは十分にありうると認識した上で，役員全員に直前に知らせはしたが了解を得ないままに，メールを送付した。恐れていたとおりこれは役員会内に禍根を残した。期の最初から A3-3 派の会長に対して度々不満を表していた B3-2 派の副事務局長（前述の 4 名のうちの 1 名）は，次の世界大会の開催地を決定するに際しても不服を申し立て，声明発出から半年後に役員を辞任した。

以上が事の顛末だが，本稿で論じてきた論争史に照らすとこの時の議論はどう位置づけられるだろうか。2 月 27 日の緊急役員会に先立ち，執行部内では代替案も検討していた。会長と会計は，ロシアの宗教学者に対する制裁を含まず，憂慮と連帯の意を示す内容の声明であれば，対外的発出に賛成してもよいと言っていた。おそらく 12 名全員で討議できていればそれが落としどころになっていた可能性が高い。だが，筆者には違和感があった。それまでの IAHR のアイデンティティをめぐる議論では，A3 の立場を表明し，3 つのシナリオからは迷うことなく②を支持していたヨーロッパ人の役員たちが，ロシアのウクライナ侵攻については政治的声明を出すことに簡単に賛同したのである[22]。IAHR 設立以来の最大の危機だから，前例がなくても，会則がどうであっても，発出して構わないという理由で。しかもそれは 2005 年東京大会のテーマ以上に政治的だったと言いうる。東京大会は暴力一般，平和一般に関するものだったが，声明の方は特定の国家と文脈に対してのものだからである。

---

[22] 付け加えれば，2001 年アメリカ同時多発テロの発生時，IAHR と関係が深いヨーロッパの宗教学者はちょうどヨーロッパ宗教学会（EASR）第 1 回大会をケンブリッジで開催していた。大会中，もちろん個々の参加者はニュースを見たが，学会として声明等のアクションを起こすことは話題にも上らなかった。それどころか雑談の中ではアメリカが報いを受けたという声もあったという。

つまり，政治的問題から距離をとる A2 の立場は B3 派からヨーロッパ中心主義と批判されていたが，今回の声明発出もまた一つのヨーロッパ中心主義と言いうるものであった。IAHR 内のアフリカ人役員は緊急会議を欠席し，意見を表明しなかったが，IAHR が加盟する国際哲学・人文学会議（CIPSH）が同時期に同じ問題について理事会声明を検討した際には，アフリカ人の理事が発出に反対した。これはメール審議だったが，NATO がリビアを空爆したときには CIPSH は何もしなかったのに，ウクライナがロシアに攻撃されたら態度を一変するとは，欧米人の偽善者ぶりにはあきれると率直に述べたのである。

さらに，IAHR や CIPSH がロシア批判の声明を出すことは，これらの国際学会の創設趣旨にも反していた。両学会，また自然科学分野で CIPSH に対応する ICSU，社会科学分野で対応する ISSC は皆，第二次大戦後にユネスコの直接的・間接的働きかけにより立ち上がった。目的は，冷戦下で政治的には世界が東西に分裂した状況で，研究者の学術的交流を可能にすることだった。これがこれらの国際学会が政治からの自律を保つことにした大きな理由だった[23]（加えて IAHR の場合は神学化につながる応用科学化を避けるために，特定の政治的立場をとることにはいっそう慎重な態度をとってきたことについては，本稿で論じてきた通りである）。

また，筆者には，IAHR や CIPSH がこのような状況で議論すべきことは，反戦声明を出すかどうかよりも，関連していても学術的な問題の方ではないかという思いもあった。反戦声明はさまざまな政治的・社会的団体からも出すことが可能であり，実際出されてもいた。それに対して学者ならではの役割は，長年の根本的な問い，たとえば正戦（倫理的に正当化されうる戦争）とそうではない戦争を分けることはできるのかといった問題をそれぞれの専門的知見をもとに反省的に議論し，その成果を世に出すことではないだろうか。そのような議論抜きに声明を出しても，それは自己満足の域を出ず，他方，議論も声明も何もしないならばそれはただの逃避であろう。そのような筆者の意見は，しかしながら CIPSH の審議で賛同者を得ることはなかった。

課題と展望

第三次世界大戦に拡大し得る危機が目と鼻の先で起こったという認識は，少なからぬヨーロッパの A3 派宗教学者の態度を変えた。それに伴い IAHR の方針をも変えるかどうかは 2023 年 12 月開催予定の理事会での第一の議題になる予定である。この論争において日本の宗教学者はどのような役割を果たし得るだろうか。

---

[23] CIPSH の場合は，これは前身である国際知的協力委員会（ICIC: International Committee on Intellectual Cooperation　国際連盟の下に 1922 年に設立）の戦前の教訓に基づいている。ICIC には理系部門と哲学・人文学部門があり，前者は政治から距離をとっていたが，後者は 1930 年代にはイタリアやドイツの学者とどう協力を維持するかに苦慮し，度々政治的な立場もとった。学者によって構成されつつも，各国の代表者から成る組織という面も持っていたからである。1939 年には国連とともに解体するが，理系部門は ICSU として存続した。（以上は Luiz Oosterbeek CIPSH 現会長による説明と“A Brief History of The International Council for Philosophy and Humanistic Sciences”に基づく。http://www.cipsh.net/web/channel-8.htm）（2023 年 1 月 31 日閲覧）

非欧米地域の宗教学会の中では，日本宗教学会が最も早く IAHR に加盟したこと，さらに世界大会を早くは 1958 年に，次いで 2005 年に主催したことは日本の宗教学者にとって貴重な遺産と経験になっている。役員会にも日本人の宗教学者は継続して選出されてきた。そのため，A3 派 B3 派双方の立場に身を置きその主張を理解できるだけでなく，IAHR の歴史を踏まえて意見を言える，それによって IAHR の意思決定に影響を及ぼし得る位置にある。2023 年の重要な理事会は東京で開催することに決まったが，それは日本の宗教学がレリジョニストとの批判を受けながらも期待と信頼をも寄せられていることの現われである。以下はその準備としての私見である。

IAHR を A3 に純化していくならば（シナリオ②），IAHR は EASR に限りなく近づき，それとしての存在意義を失うということ，あるいは A3 的教条主義により活動が低迷することは自明のように筆者には思われる。より中立的に言えば，A3 を入れない多様性は多様性ではなく，B3 を入れない普遍性は普遍性ではないであろう。しかし各国の政策や社会的需要が B3 派的応用研究を促す現状では，A3 あるいは基礎研究は特権的な地位にあるどころか危機に晒されており，国際的協力による振興を必要としている。学問観による意見対立自体を肥やしにして内部の分裂を防ぎ，どの立場の研究者にとっても刺激となる交流の場を実現することが IAHR の，ひいては世界の宗教学の最大の課題である。

それに取り組むためには，理論面に限って言えば学問論・科学論の更新が急務である。これまで A1⇔B1，A2⇔B2，A3⇔B3 の対立はしばしば経験科学的宗教学⇔神学の対比に重ね合わされてきたが，学に対する社会的妥当性の要求が強まる現状には，その対応のさせかた自体が合わなくなっている。たとえば宗教倫理学者の Richard Miller は近著『なぜ宗教を研究するのか？』において，経験科学的宗教学にも科学外的目的があるべきだと論じ，それを道徳的想像力という言葉で表し，その拡張のための批判的ヒューマニズムとして宗教学を再定位することを提唱している（Miller 2021）。それが B3 派の新たな戦略だとすると，A3 派は科学外的目的に関する議論を無視するのではなく，道徳的宗教学と非道徳的宗教学の分け難さについて反省を促すような関わり方が可能であろう。先の例でいえば特定の戦争に対して態度決定をする B3 派に対して，A3 派は単にそれを政治的だと批判するのではなく，倫理的に正当化できる戦争はあるのかと問う方が，学術団体らしい議論を実現できるだろう。

学のグローバル化という課題は宗教学のものだけではなく，たとえば哲学では，これまで哲学と言えば西洋哲学だったことを反省し，「世界哲学」構築の試みが始まった。その提唱者は次のように述べている。

> どの思想であれ，世界の人々の間で，哲学として論じられるには，普遍性と合理性が必要になる。他方で，その普遍と合理という概念こそ，ギリシャ哲学が生み出した遺産であるとの認識も必要である。世界哲学への挑戦は，私たちを改めて，「哲学とは何か」の問いにさらすことになる。（納富 2020: 18）

しかし何を持ってして「普遍性」「合理性」を満たしているとみなすだろうか。現在の日本の哲学界では，学術論文などを見る限り，①文献学によって学問としての厳密さを担保す

る（原典を原語で読むのは鉄則），②信仰ではなく論理に依拠すべき（徹底的な反省知が哲学），③臨床哲学・応用哲学は時代の要請ではあるが，有用性に縛られては危険という共通理解がある。しかし，欧米・日本以外の地域には，これらの基準を共有しない哲学（研究）者が多数いるのではないだろうか（すなわち人生哲学的評論家，宗教家的実践者，アクティビストなど）。そのような人たちの哲学を「世界哲学」は包摂するのだろうか。それとも，「それは哲学ではない」とするのか。その場合の「世界哲学」の担い手は，欧米・日本中心にならないだろうか。

これに関係して提唱者は「多元的」な世界哲学をと謳うのだが，現在，世界に哲学を開こうとする場合，それを妨げる哲学的立場の対立は，「多元的」というより，①②③のそれぞれについての二項対立になるということが，IAHR の歴史からは予測できる。つまり，アジア，アフリカの「地域」や「文化」ごとに異なる哲学があるのではなく（あったとしても，①②③を満たす限り，それらは包摂することが容易であろう），①②③をめぐって大きく二陣営に分かれるのではないだろうか。この問題を解決し対立を解消することなく，「世界哲学」を推進するならば，国際哲学会（哲学系諸学会国際連合 FISP）をヨーロッパや分析哲学系の研究者が「哲学ではなくなった」と敬遠し，結果としてアジア・アフリカ人ばかりになり多様性は再び失われるだろう。

哲学はこのような問題に直面する手前のようだが，宗教学は IAHR の創設以来格闘し続けている。科学は一つなのか複数なのか，一元的なのか多元的なのかという議論は，いまや人類学系の研究者が，先住民の視点から宗教学をデ・コロニアル化することを提唱することにより，ますます白熱化している。さらにニュー・アニミズムなど，人間以外の存在との関係性を理論に組み込むアプローチが論争に拍車をかけている。

これらと同時進行しているのは，「宗教」概念を他概念によって拡張しようという宗教学の動向である。宗教と世俗の分割が恣意的・西洋近代的なものなのであれば，宗教学の対象を「宗教」と置くことには必然性はなく，むしろ射程を狭めるという意見である。前述の Taves はこの理由から「宗教」概念を「世界観」に置き換えることを提唱している。それについては高等教育機関から宗教学専攻を自ら取り下げるのかと特に A3-3 派から抵抗があるのも興味深い。レジジョニストを批判してきた研究者たちが「宗教」の自律性を訴えているためである。

以上の論争は突き詰めれば「信と知」の問題に遡り，それを「宗教と世俗」の対立に合致させるか，意図的に外すかが目下の争点になっている。問題は，誰が合致させ，誰が外すのかなのである。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP 20H01188 の助成を受けたものである。

資料

IAHR 役員会名で発出されたロシアによるウクライナ侵攻に対する声明原文

International Association for the History of Religions Executive Committee statement concerning Russian war against Ukraine

In the wake of renewed Russian invasion of Ukraine we express our solidarity with the suffering Ukrainian people and our academic colleagues—scholars of the study of religions, who instead of conducting research and teaching students have to seek a safe haven against the bombing of their homes and cities. The scale and brutality of the military aggression unleashed by the Russian state against its peaceful neighbour demands that we take a stance and act without delay. In strong solidarity with the suffering Ukrainian nation we recommend that all member associations of the International Association of (*sic*) the History of Religions:

a) terminate all cooperation with academic institutions and scholarly associations working in the study of religions area that have links to the Russian state or receive any form of Russian state funding or recognition;

b) allow Russian scholars to participate in the international and regional scientific events linked with IAHR only as independent scholars not representing any Russian state research and/or study institution;

c) allow Russian scholars to publish their research results in the academic journals linked with IAHR and its member associations only as independent scholars not representing any Russian state research and/or study institution;

d) refrain from publishing in academic journals funded by Russian state institutions.

These recommendations should come into effect immediately after the dissemination of this statement and will apply until further notice.

We also urge all IAHR national associations to discuss how their members can contribute to helping the Ukrainian state and its people at this time by sharing employment and refugee information with Ukrainian colleagues as well as considering possibilities to arrange political support for Ukraine by approaching national governments and regional organisations.

February 27, 2022

参考文献

島薗進 2008「はじめに」島薗・テル＝ハール・鶴岡編『宗教――相克と平和　国際宗教学宗教史会議東京大会（IAHR2005）の討議』秋山書店。

田丸徳善 [1977]1987「宗教学の歴史と課題」『宗教学の歴史と課題』山本書店（初版は田丸編『宗教理解への道』（講座　宗教学　第１巻）東京大学出版会に収録）。

納富信留 2020「序章　世界哲学史に向けて」伊藤・山内・中島・納富編『世界哲学史 1――古代 I 知恵から愛知へ』筑摩書房。

矢野秀武 2020「現代タイにおける代表的な宗教研究者と若手・新進気鋭の宗教研究者」『駒澤大学文化』38 号 194-138 頁。

Cox, James L. 2006. *A Guide to the Phenomenology of Religion: Key Figures, Formative Influences and Subsequent Debates*, London & NY: Continuum.

Fujiwara, Satoko and Tim Jensen. 2020. "What's in a (Change of) Name? Much—but Not *That* Much—and *Not* What Wiebe Claims," *Method & Theory in the Study of Religion*, 32/2, 159-184.

Fujiwara, Satoko, David Thurfjel and Steven Engler. 2021. *Global Phenomenologies of Religion: An Oral History in Interviews*, Sheffield: Equinox.

Geertz, Armin. 2020. "How Did Ignorance Become Fact in American Religious Studies?: A Reluctant Reply to Ivan Strenski," *Studi e Materiali di Storia delle Religioni*, 86/1, 365-403.

McCutcheon, Russell. 2015. "Introduction: A Response to Donald Wiebe from an East-Going Zax," *A Modest Proposal on Method: Essaying the Study of Religion*, Leiden: Brill.

Miller, Richard B. 2021. *Why Study Religion?* Oxford University Press.

Pye, Michael. [1989]2015. "Cultural and Organisational Perspectives in the Study of Religion," NVMEN*, the Academic Study of Religion, and the IAHR: Past, Present and Prospects*, ed. by T. Jensen & A. Geertz, Leiden: Brill (originally published in M. Pye ed., *Marburg Revisited.* Marburg: Diagonal Verlag, 1989).

Schimmel, Annemarie. [1960]2015. "Summary of the Discussion," NVMEN*, the Academic Study of Religion, and the IAHR: Past, Present and Prospects*, ed. by T. Jensen & A. Geertz, Leiden: Brill (originally published in *NVMEN* Vol.VII, Fasc. 2. Dec. 1960).

Sharpe, Eric J. [1975]1986. *Comparative Religion: A History*, London: Duckworth.

Strenski, Ivan. 2018. "What Can the Failure of Cog-Sci of Religion Teach Us about the Future of Religious Studies?," *The Question of Methodological Naturalism* (Supplements to Method & Theory in the Study of Religion 11), ed. by Jason N. Blum, 206-221.

Strenski, Ivan. 2019. "Much ado about quite a lot: a response to Alessandro Testa's review of Strenski, *Understanding Theories of Religion*," *Studi e Materiali di Storia delle Religioni,* 85/1, 365-388.

Testa, Alessandro. 2019. "Religion: Evolutionism, modernism, postmodernism; what comes next? A review essay of Ivan Strenski's *Understanding Theories of Religion: An Introduction*," *Studi e Materiali di Storia delle Religioni,* 85/3, 342-364.

Wiebe, Donald. 2020. "A Report on the Special Executive Committee Meeting of the International Association for the History of Religions in Delphi," *Method & Theory in the Study of Religion,* 32/2, 150-158.

Wiebe, Donald. 2021. *An Argument in Defence of a Strictly Scientific Study of Religion: The Controversy at Delphi*, Toronto: Institute for the Advanced Study of Religion.

The Trajectories and Current State of Debates on the Science-ness of the Study of Religion/s

Satoko FUJIWARA

This paper summarizes long-standing and on-going international controversies over the nature of “science” of the academic study of religion/s.